Пётр Ильич Чайковский

小説 チャイコフスキー

■クラウス・マン著

■三浦靱郎訳

音楽之友社

Пётр Ильич Чайковский

小説

チャイコフスキー

クラウス・マン著
三　浦　靱　郎訳

音楽之友社

訳者紹介

三浦靱郎（みうらゆきお）

1912年　熊本市に生まる
1934年　東京大学文学部独文科卒業
　　第七高等学校，第五高等学校，法政大学を経て現在
　　東京学芸大学教授
訳　書　フーフ「小説モーツァルト」
　　「小説ベートーヴェン」
現住所　東京都世田谷区成城7－6－15

©

小説チャイコフスキー

昭和四十七年一月三十日　第一刷発行

定価　七八〇円

訳者　三浦靱郎（みうらゆきお）

発行者　目黒三策

東京都新宿区神楽坂六の三〇
発行所　株式会社　音楽之友社
電話〔二六八〕六一五一～五
営業部〔二〇二〕四二九一～五
振替東京一九六二五〇
郵便番号一六二
大永舎印刷／黒田製本

1073-215140-0777

小説チャイコフスキー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

第一部

第一章

部屋の中は暗かった、ドアのほうからだけ、ひとすじの光が流れていた。その光が消えた、ボーイがドアを静かに、うしろ手でしめたのだった。

「お盆をどこにおおきしましょうか」と、ボーイがたずねた。数秒経過した。暗闇の中からは、声がなかった。ボーイは、返事をまつように、ドアから二三歩はなれて、立ちどまった。それからひかえめに、しかしいくらか力をこめて、咳ばらいをすると、ようやく返事があった。その人は、ふかぶかとふとんにもぐって、静かにベットに寝ていた。

「そう——ここのベットのそばに——ここの小さなテーブルの上に、きみ……」

その声はやわらかくて、ゆっくりした、歌うようなアクセントで、ドイツ語を話した。ボーイは微笑した。外国人の世話をするのが、おもしろかったのだ。外国人がみな、じぶんにはなんでもない言葉で苦労していることに、こころよい優越感をおぼえたのだ。

「どうぞ、お客さま」と、ボーイは言った、その声には、もういくらか父親のような響きさえあった。ドアからベットのほうへ二三歩あるき、まるい、小さなテーブルをひきよせて、その上にお盆をおいた。

「カーテンをお引きしましょうか」と、一語一語はっきり発音して、ボーイはたずねた。じぶんがいま話しかけている相手は、外国人だ、声のやわらかな初老の紳士だ、こういう人は親切に、同時に敬意をはらって、扱うにかぎる、そうすればチップにありつけるんだ。

「ありがとう」と、その人は言ったが、ふとんの中でまだからだを動かそうともしなかった。「よかったら、半分だけあけてもらうかな。——ぎらぎらした光はがまんがならないから」と、いくらか悲しそうにつけくわえ、それからようやく頭を動かして、ボーイの顔をみた。ボーイは、よく病室でやるような、静かな動作で、窓をおおっている重

いビロードのカーテンを、引いた。光が部屋の中に流れこんできた。ベットの中の人は、思わずまばたきした。まばたきしながら、とりちらかった、この異国のホテルの部屋の中を、眺めまわした。半分あけたトランク、衣類、本が、ビロードをはった安楽椅子やルネサンスまがいのたんすの上に、放りだしてあった。

「きのうの晩着いたときは、きっと相当なものだったんだなあ」と、その人は考えた。「ああ、そうだ、汽車の中でコニャックを……」かれは顔をしかめて、目をとじた。

「いいお天気ですよ、きょうは」と、ボーイは、元気のいい、しかしていねいな口調で、窓ぎわから言った。「ほんとうにいい冬の日です」と、外国人がまだだまっているので、元気づけるようにつけくわえた。

その沈黙は、ボーイがほかの客で知っているような、きびしい、拒否的なものではなかった。むしろ悲しそうで、頼りなさそうで、いくらかはにかんでさえいた。それをみてボーイは、この客を子どもなみに扱うことに、きめた。はりきって、かれは教えた。

「そこの、紅茶のポットの横にあるのが、朝の新聞です」それからほんのすこし間をおいて、ややきつい調子で、つけくわえた。

「すぐにお勘定をなさいますか」

問いかけられたほうは、すぐには何のことか、わからないようだった。とほうにくれたような顔で、目のまえに立っているボーイを見つめた。ボーイは、背の高い、すらりとしたからだに脂じみた制服をきて、まるでプロイセンの近衛将校のようだった。客のみょうにしみとおるような、深い青色の、悲しそうに思案している目は、がっちりした若い男の気分を、ふたたびやわらげた。

「すぐにお金をお払いになりますか」と、かれはたずねて、軽く頭をさげた。

客は半ばからだを起こして、いそいで小さなテーブルの引出しをあけた。その中には、雑多な紙のあいだに銀貨がころがっていた。

「ああ、そう――」と、かれは言った、「そう――もちろん――いくら――」ごま塩のひげの人が不器用な手つきで、封筒や手帳や楽譜のあいだから、あわててお金を探しているのを見ると、ボーイはほとんど感動めいたものをおぼえた。同時にしかし、かれの活発な頭は言っていた、じぶんも社会人なのだから、そんな感動を許してはならない、ことに少々こっけいな外国人にたいしては。

「お部屋での朝食は三マルクです」と、かれは手みじかに

言ったが、言いながら、澄んだ目がふてぶてしくきらりと光った。かれは、帳場にわたす三倍を要求したのだった。——不愉快なことが起こったら、いつだって、誤解だったと、言い抜けられるさ。

「ああ、そう——もちろん」と、その人は言いながら、引出しの中をまだいっしょうけんめいかきまわしていた。こんどは、あからさまの好意といくらかの同情をもって、ボーイは相手を眺めた。

客の頭のわずかばかりの、鳥の羽のようにふわふわした毛は、もうほとんど白かった。頬からあごにかけて、まるく、かなり短くそろえたひげと、垂れさがっている口ひげも、ごま塩だった、口ひげの下には、厚くてやわらかく、ひどく赤い唇が見えていた。引出しからふたたびからだを起こしたときには、顔は充血していた。息づかいがいくらか荒かった。

かれがボーイに渡したのは、一ターラー銀貨と一マルク銀貨で——それは、あの厚かましい値段に一マルクのチップを添えたものだった。

「かなり高いんだね」と、その人は言って、ねむそうな、いたずらっぽい微笑をうかべた。

「そうなんです、お客さま」と、ボーイは言いながら、すこし赤くなったのを感じて、じぶんでも驚いた。かれはお金を握ったまま、もじもじして立っていた。奇妙なことに数秒間、この人にいくらか返したほうがいいんじゃないかと、大まじめで考えていたのだった。

「きみはベルリンの生まれかね」と、その人はたずねた。ボーイはまた、じぶんに注がれている、しみとおるような、青い、悲しげな視線を感じた。

「いいえ、ハンブルクです」と、かれは言って、きゅうに敬意を表して、靴のかかとをぱちんと合わせた。

「そうか、ハンブルクね」と、その人は言った。ふたたびじっとあおむけに寝ていたが、頭は、若い男の顔がみえるように、まわしていた。

「ハンブルクへも近く行かなければならないのだ。きれいな町だね」

「失礼ですが、お客さまはどちらのお国でしょうか」と、ボーイは言ったが、われながらうまい言い方をしたと、得意になっていた。

「ロシアだ」と、その人は言って、寝たまま頭をもとにもどした。もうボーイのほうは見ないで、手を振って、帰ってもいいと、つたえた。ボーイはひきさがって、静かにドアをしめた。

ベットの中の男は、目をとじて、身じろぎもしなかった。〈おやおや、おれはなんでこんなところにいるんだろう〉と考えていた。〈なんでこんなところにいるんだ。ここになんの用事があるんだ。なぜいるべきところにいないんだ――神よ、理解しがたい方よ、なぜわたしは家をでてきたのでしょう。ここでは、知っているものは誰もいないし、おれを知っているものもほとんどいない。みんな、おれをなぶりものにしようとしている、おれという哀れな奴に陰謀をたくらんでいる。ああ、こんどの旅行はまったく気違い沙汰だった……〉このことを考えると、もう何をする元気もなくなってきた。〈おれはもうからだを動かすこともできやしない〉と、また考えた。〈何もかもむなくそ悪くて、ばかげていて、最悪で、もうからだを動かすこともできやしない〉

かれはそれでも、からだを動かした。起きあがって、紅茶をついだ。しかし、それを口にもっていく前に、朝の新聞をひろげた――一八八七年十二月二十九日のフォス新聞だった。ぱらぱらとめくると、第三面に次の記事を見つけた。

「本日、十二月二十九日、有名なロシアの作曲家チャイコフスキー氏がベルリンに到着する。多数の友人やファンは十時半より、レストラン、ルッター・ウント・ヴェーグナーで、同氏を歓迎する午餐会を開くはずである」

チャイコフスキーは新聞をまるめて、床にたたきつけた。ベットの上にからだをぴんと立ててすわり、怒りのあまり、呻き声をあげた。顔に血がのぼり、秀でた額にふとい静脈が威嚇的にあらわれた。かれは、故郷のロシアの御者や兵士が口にするような、呪いの言葉をはいた。ふたつのこぶしでふとんを叩き、せめてもの腹いせをした。はっきりしない呪いは、あとでは脈絡のある怒りの言葉になった。

「とんでもないことだ」と、かれは部屋の中にどなった。「前代未聞のことだ。下劣な仕業だ。みんな、おれを笑いものにしようとしている。おれを侮辱しようとしているんだ。それが狙いなんだ。ああ、あのエージェントの奴め。ああ、あのノイゲバウアーの奴め。いまいましいジークフリート・ノイゲバウアーの奴め」

エージェントの名前を口にすると、ますます腹がたってきて、荒れ狂っている男はもうじっとしていられなくなった。ベットの端に腰かけながら、足の先で、ベットの下にあるはずのスリッパをさがした。見つからなかった。足の裏が、埃のたまったベットのそばの敷物――偽物の北極熊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

の毛皮――にふれると、一瞬ぞっとした。その嫌悪感も怒りのあまり忘れて、素足のまま、部屋の中を歩きまわった。長い絹の寝巻がはだけた。身振り手振りをまじえ、嘆き悲しみながら、窓とドアのあいだを行ったり来たりした。猛然と突進するような歩き方は、重々しく足をふみつけるかと思えば、翼をひろげて宙をかけるようにもなった。ひげ面の男が、素足で、白い着物をひるがえしている姿は、聖なる怒りに燃えて、独房の中を檻のけだもののように走りまわり、世間の卑劣な仕打ちに抗議している隠者のような印象をあたえた。

「多数の友人とファンだと」と、怒れる男はあざわらうように叫び、こぶしをかためた両腕をのばして、部屋の中央に立ちはだかった。「多数の友人とファンだと――そいつは愚弄だ。こんなことをこのいまいましい新聞にのせたのは、もっぱらおれを愚弄するためだ。ここじゃ、猫の子一びきおれを知らないじゃないか、猫の子一びき。おれは完全に無名だ。いったい、おれがきょうベルリンにいることを、だれが、どこから、知ったんだ。おれは旅の途中で寄っただけだ、休息の日にするはずだったんだ、隠れていようと思ったんだ。ノイゲバウアーの奴はモスクヴァとペテルブルクにスパイを放っているにちがいない。あいつは、いつおれがここに着くか、さぐりだしたんだ。――ノイゲバウアーの奴め。ああ」かれはまたしても呻き声をあげた。ノイゲバウアーをつかまえることは、できるわけもなかったので、しわくちゃになった新聞をやたらにふみつけた。

新聞をふみつけているうちに、鏡の中のじぶんの姿が目にはいった。白い着物をきて、腹をたてている灰色の頭が見えた――額が赤黒くなってあばれている隠者――とびはね、足をふみならしている、こっけいな老人が見えた、そして恥かしくなった。

「気を静めなくちゃいけない」と、かれはつぶやいた。「こんなに興奮したって、なんにもならない。鎮静剤でも飲もう」

かれはベットに腰かけて、小さなテーブルの上の薬をさがした。そうしているうちに、足もスリッパを見つけた。小さなコップに薬を数滴たらしているあいだに、しだいに落ちついてきたものの、まだ腹だたしそうに、つぶやいた。「友人とファンか。前代未聞のことだ」

小量の水薬を飲んでいるうちに、ずるそうな、満足げな笑いが、顔にうかんだ。〈だがおれはあいつらにひと泡ふかせてやろう〉と、考えていたのだった――そしてこの思

いつきが、魔法のように、かれの機嫌をなおした。〈おれはあいつにひと泡ふかせてやろう、あのノイゲバウアー君に。あいつをびっくりさせてやろう。あいつには絶対に見つからないようにするんだ。朝っぱらのビールはひとりで飲むがいいさ。おれはいない、おれは残念ながら行かないんだ。あいつだって、おれがどのホテルに泊ったかは、知るまい——そう何から何まで探りだしたわけではないだろうからな。それから、あしたは朝早くライプツィヒに発つ。ベルリン・フィルの諸公には、演奏会のためにここに戻ってきたときに、お目通り願うとしよう。きょうは隠れている、どこにもおれは見つからないんだ。みなさんはせいぜいお楽しみなさい、レストラン、ルッター・ウント・ヴェーグナーで、友人諸君とファン諸君と。わたしは朝の散歩をしてますよ。いったいいま何時かな〉

小さなテーブルの上には、ナトロンの小箱と吉草の煎じ薬と家族の二枚の写真のあいだに、りっぱな時計があった——高価なプラチナ製で、両面に美しい像が象嵌してあった。それを手にとるとき、チャイコフスキーはきまって、愛撫するように眺めた。それはかれのお守りであり、いちばんいいものであり、ある、秘密につつまれた、金持の、親切な女友達の贈り物であった。かれは蓋をぱちんとあけた。十時十分前だった。

〈そろそろ着換えることにしよう〉と、かれは心にきめた。〈レストラン、ルッター・ウント・ヴェーグナーにおれを歓迎してくれるという人たちが集まるころには、もう朝の散歩に出かけてしまっているんだ〉

かれは顔と上半身をつめたい水で洗った。テーブルや椅子の上にちらかっている着物を集めかけながら、甘い、短いメロディーをロずさんだ——ふと頭に浮かんだ長いメロディーのほんの一部、断片だった。

〈モーツァルト——〉と、かれは、靴下のほうへ身をかがめながら、考えた。〈なんてすてきなんだろう。なんて楽しいんだろう。——まるで、何もかもきゅうに和らげられ、魔法にかけられ、きちんと整理されてしまうみたいだ。こんなものがあるなんて、どれほど感謝しなければならないことだろう……今晩オペラで、モーツァルトのものを何かやってくれるかな——《フィガロ》をぜひとも聞きたいんだが。だが、たぶん《ローエングリン》しかプログラムにはのっていないんだろう〉

かれはそれから外を眺めた、美しい冬の日だった。窓にきれいな氷の花模様ができていた。〈きれいだなあ〉と、チャイコフスキーは思った。かれは煙草に火をつけた。興

奮して、煙草を吸うことさえ忘れていたのだった。いつもなら、目をさまして最初に手をのばすのは、煙草だったのだが。

さっきまで、踊っている隠者の姿がうつっていた鏡は、いまは、絹のレースで縁どりした黒い服を着ている、堂々たる紳士をうつしだしている。ネクタイを結んでいると――まだ、やさしく慰めてくれる、美しいメロディーを口ずさんでいた――ドアをノックする音がした。チャイコフスキーは考えた。〈ボーイだろう、朝食を下げにきたんだ。それはそうと、何も食べなかったな。あのいまいましい新聞があまり癪にさわったものだから。あの若い奴は紅茶に法外な金を要求しおった――だがそのほかは、まったくかわいい若者だった、文句なしにかわいい若者だ〉

「おはいり(アンレー)」と、鏡のほうを向いたまま、チャイコフスキーは言った。

ドアがあいた。チャイコフスキーは、食器の音と若いボーイの張りのある、いんぎんな声が聞こえるのを、待っていた。いや、かれは、じぶんがその声の響きを楽しみにしていることを――それはなんといっても若い声だった――そして、じぶんがいま、わきを向いているのも、このささやかな楽しみの期待をわざとのばそうとしているからだということを、認めないわけにはいかなかった。ようやく、ドアのところでもじもじしている人は言った、しかし、それは若い声ではなくて、鼻にかかった、ひどく丁重で控えめでありながら、押しつけがましい言い方だった。

「チャイコフスキー先生でいらっしゃいましょう」

チャイコフスキーはくるりとふりむいた。最初、びっくりして青くなり、それから腹がたってきて、赤くなった。

「いったいきみは誰かね」と、おどしつけるように言った。額にまた静脈があらわれた。

「あなたのエージェントのジークフリート・ノイゲバウアーです、チャイコフスキー先生」と、ドアのところの男はおだやかな声で言って、にこやかに微笑した。

チャイコフスキーは数秒、からだがしびれたように、言葉もなく立っていた。ようやくかれは、低い声で言った、「これはひどい」

そして、悪魔が現われでもしたかのように、ジークフリート・ノイゲバウアー氏をにらみつけた。

「お目にかかれて、先生、大変うれしく存じております」と、エージェントは言って、チャイコフスキーのほうへ二三歩進みでた。

ジークフリート・ノイゲバウアーは奇妙な顔をしてい

た。赤みがかった髪の毛はうすく、注意ぶかく櫛をいれてある、わずかに数条の毛が、細長い頭の上をかくしていた。ひげもうすく――頭髪よりもずっと強烈な赤だった――すけて見える薄地のカーテンのように、あごの端からたれさがり、赤みをおびた、つるつるした顔を、みょうにむきだしにしていた。顔は鼻が長くて、まつ毛のない澄んだ目をもち、無遠慮で、それでいてもの悲しそうだった。鼻の下はきれいに剃ってあったが、それはそのころとしては珍しく、薄くて赤いひげとの対照で、あっと驚くような印象をあたえた。口はにこやかな、それでいていつも何か気にさわっているような微笑をうかべていた。上唇の下には、きたならしい色をした歯が見えた。それは、もの好きに嗅ぎまわっているような、長い、赤みがかった鉤鼻とともに、顔にみょうに動物的な表情をあたえていた。その顔は兎と山羊を同時に連想させた。

〈こいつはなるほど悪魔みたいな男だ〉と、チャイコフスキーは考えながら、客を嫌悪感と強い好奇心をもって観察した。ジークフリート・ノイゲバウアーは相手の視線を、おだやかな微笑をもって、受けとめた。放心したような、みょうに無感覚的な様子は、むしろ、じろじろ見られていることさえ、気づいていないようだった。まるく開かれた、まつ毛のない、澄んだ目の上には、霧がかかっていた。この霧が、この男全体を近づきがたいものにしていた。たとえどなりつけても、この男は、ただにこやかに、ほとんどお世辞でも言われたように、微笑するだけだろう、おもしろそうに長い鼻をくんくんいわせ、目には、怒りはもちろんのこと、驚きさえも現われないだろう。チャイコフスキーは――どなりつけるより先に――悟った、これはだめだ。この男はおれの気持などぜんぜんわからないだろう。この男は、おれがいままでに会った中でいちばん下品な奴だ。それでいて、この男の風采には、どことなしに威厳がある――それがふしぎだ。高い立襟カラーや、焦げ茶で、大柄な格子縞の、フロックコートのように長い上衣のせいだけじゃない。パットをたくさんいれてぴんと張った、広い肩や、驚くほど細い腰まわりにも、それがある――いや、鼻をうごめかしている小人の王様みたいな頭をした、この奇妙な男は、なかなかどうしてりっぱなものだ――伏せた目の、おっとりと放心したような視線にも、それがある――恐ろしい目、謙虚でそして残酷な目を、おれのエージェントはしている。

「わたしがどのホテルに泊っているか、きみはどこから知ったのかね」と、チャイコフスキーは、低い、いくらかし

ゃがれた声で、たずねた。かれは、どなるまい、大きな声はいっさい避けようと、かたく心にきめていたのだった。「そもそも、わたしがここに来ることを、どこから知ったのかね」

「お迎えにあがるためには、存じないわけにはいきませんでしたので、先生」と、エージェントは答えて、謎めいた薄笑いをした。

「迎えに――何のために」チャイコフスキーの顔は落ちつきを失って、ふたたび赤くなった。

「先生を歓迎する午餐会です」と、ジークフリート・ノイゲバウアーは言って、歯を見せ、ヴェールに隠された視線を投げ、鼻をすこししかめて、たのしげに息をした――平然とあらゆる覚悟をきめて――これからどういうことになるかを、待っているようだった。

チャイコフスキーは両方のこぶしをかためて、エージェントのほうへ二歩進みでた。かれは、この男をなぐってやりたいと、しきりに考えたが、なぐりつけたところで、しかめた鼻の下でにこやかに微笑するだけだろうと、感じた。そこで、じぶんをおさえて、いくらか荒い息づかいで、こう言った。「それはひどい。きみはそのグロテスクな午餐会のことを、どうしてもわたしに話そうというんだね」

「でも、先生」ノイゲバウアーの声には、おだやかな非難の調子があった。「もう何週間も前に、午餐会を準備しておきますと、手紙でお知らせしてありませんでしたでしょうか」

「そして、わたしはもう何週間も前に、そんな催しには参加しないと、返事してあったはずだよ」と、チャイコフスキーは腹をたてて言った。「わたしは、知らない人はきらいだということを、もともと人間嫌いで、気が小さいんだということを、返事しておいた――いや、わたし個人に関して、午餐会とか、それに類するけしからんことを催すのは、いっさい禁じてあったはずだ。わたしはそれをはっきり禁じなかったかね、それとも違うかね」チャイコフスキーは威嚇するようにたずねた。

ジークフリートは鼻を鳴らして、ほめられでもしたように微笑した。「ああ、わたくしは、それをそれほど重大なこととは、思っていませんでした」と、女のようなまめかしさで言った。

チャイコフスキーは知った。おれはこの話をできるだけ早くきりあげなければならない。こういう話し合いはまったくおれの性に合わない。ああ、旅行になんぞでかけるんじゃなかった。旅行にでかけるなんて、おれはどうかして

いた、しかもひとりで――旅行にでりゃ、こんな奴に出会ったり、不愉快な世間の奴らといざこざが起こるのは、あたりまえだ。

「きみがそれを重大に考えようと、考えまいと」と、かれはきみの悪いほど低い声で言った、「わたしはきみの午餐会なるものには出ないよ」

ノイゲバウアーは薄いひげをなでた、ひげは、電気がおこったように、低くぱりぱりと音をたてた。「まもなく十時半になります」と、おだやかな調子をくずさずに言った。「みなさん、ルッター・ウント・ヴェーグナーでお待ちです」

それを聞くと、チャイコフスキーはくるりとうしろを向いた。

「あなたがお考えになっている以上に、わたくしどもの町には、あなたのファンがたくさんおります」ノイゲバウアーはやさしく説き聞かすように言った。

「友人とファンか」と、チャイコフスキーは不満をろこつに表わして言った。「友人とファン――わかってるよ」

「もちろんです」と、ジークフリートはおだやかに言った――その言葉の調子には、理性的な、いや、説得的なものさえあった。

「そして、わたくしもあなたの友人とファンのひとりです」

チャイコフスキーはかれのほうに向きなおった。エージェントはみょうに神妙な姿勢で、頭をいくらかかしげ、両手をおなかの上に組んで、立っていた。チャイコフスキーのびっくりした、いや、とほうにくれたような視線を受けると、特別鼻にかかった、ゆっくりした、大事なことをささやくような調子で、言った。「もちろんです。わたくしは、あなたの作曲なさったものは、みんな好きです」

チャイコフスキーはあっけにとられて、この言葉はそのとおりに信じなければならないことを、感じた。このねっちりした、きみの悪い男は、ほんとうにおれの作品をみな好きなのかもしれない、おれの作品をみな知っていて、毎晩ピアノでそれを弾き、そしてひとりで感動しているのかもしれない。なんと恐ろしく、そしてなんとうれしいことだろう。チャイコフスキーはこの男に同情を感じた――いや、さっき怒りと嫌悪を感じたのとほとんどおなじくらいの強さと烈しさで、同情を感じた。心の中で、同情が驚くほど早く怒りにとってかわるのは、かれにはよくあることだった。

「きみはほんとうにわたしの音楽がわかっているのかもしれない」と、かれは早口で言った。「しかし、じぶんをも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co